

## 清潔だが優しさのない町

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

パリの町は、伝統的な石造りの街並みが続いていて実に美しい。しかし、間近に見るとかなり汚れていることに気がつきます。観光客の集まる場所はまだしも、その周辺へ行くと、お世辞にも清潔とは言えません。

いちばん目を引くのはタバコの吸い殻と犬の糞です。鳩の糞が上から落ちてくる所もありますし、ゴミか何かの臭気が常に漂っているコーナーもあります。

美しいけれど清潔ではない町と言ったらよいのでしょうか。通行人は何でも道に捨てます。歩道の各所にポリ袋をセットしたゴミ捨て場があるのですが、そこへ捨てるのは大きめの物で、紙くずなどの小さなゴミは道ばたにポイ捨てです。

その中でもひどいのはタバコの吸い殻で、人々は町中が灰皿だと思っているのではないのでしょうか。私がリヨン駅のカフェで、ギャルソンに灰皿を持ってきてほしいと言いますと、床全体が灰皿だと思ってくれという返答でした。

フランスは、小さな規律については妙に寛大なところがある国だと思います。ソルボンヌ大学の前にあるカフェでは、禁煙席と喫煙席は規定通りに分かれています。禁煙席にはミクスト（共用）という札が貼ってあって、笑われました。

犬の糞を街路に放置することも禁じられていて、罰則もあるのですが、警察から注意を受けることは滅多にないと言われています。食品モールの中で、犬に糞をさせて、片付けもしないで立ち去る人を見ましたが、周りの人たちもまったく無関心でした。

もちろん、日本のように、小さなシャベルとポリ袋を持って犬の散歩をさせている人などいるわけではなく、みんな街路のあちこちにさせっぱなしです。うっかり足元を見ないで歩くと、グシャッとやってしまって、臭いにおいをアパートの部屋まで持ち込むことになります。

こういうのは「だらしなさ」と呼ぶべきであって、「優しさ」と一緒にするのはどうかとも思うのですが、それでもこれと正反対の行動に出会いますと、やっぱりフランスの町は人間に優しいのかなと思うこともないわけではありません。

これは、アメリカの観光客に多いのですが、喫煙席に坐っているくせに、横でタバコを吸うと、煙を手で払い除けたり、顔を顰めたり、時にはこちらを睨みつけたりするのです。

中には、「私はタバコを吸わないんだ。やめてくれ」などと言ってくる人もいます。「だって、ここは喫煙席ですよ」と言いますと、「タバコが体に悪いことは証明されている。私は煙が嫌いなんだ」などという答が返ってきます。

美しいけれど清潔ではない町、清潔ではないけれど優しさのある町、パリをそんな風に見てもい

いのかなと思う理由は他にもあります。

そう思ったのは、日本に帰ってきてからの或る体験が原因でした。五年ぶりに日本に帰国して私が見たものは、実に清潔で汚れない町でした。すでに言いましたように、至る所にタバコの吸い殻や犬の糞が転がっているパリの町に比べて、日本の、私が住んでいる周辺の町がいかにもスッキリしていて、キレイかということを改めて認識したのです。空気さえ澄んでいるように思えました。

もちろん、造形的な美しさという点では、パリの町にとうてい及ぶものではありませんが、清潔感があるという点では、はるかに上を行っていました。何しろ吸い殻などどこにも見あたりませんし、ゴミや犬の糞が放置されているということもありません。

それに、ゴミ箱やゴミ捨て場が街路に無いということも、町の清潔感を高めているように思えました。毎週二回ある「燃やせるゴミ」の回収日には、街角にいくつかのゴミ袋が並びますが、それらが片付けられたあとは、まったくゴミについては気配のない町に戻ります。

私は、帰国した翌週の回収日、さっそく紙くずや生ゴミを詰めた袋を出しておきました。ところが、夕方になって、その場所へ行ったところ、思いがけないものを見たのです。私の出したゴミ袋だけがそこに残されていました。

いろいろ調べてみて分かったことなのですが、数年前から町や市の指定マークの入ったゴミ袋を使うようになったそうで、それがない袋は回収しないということでした。私の出した袋は無印だったため置き去りにされたのですが、これは五、六年前、町の指示に従ってゴミ用に準備しておいた黒いポリ袋でした。

これに続いて、ダンボールの箱が回収を拒否されるということがありました。役所に問い合わせたのですが、箱を捨てたい時は民間業者に依頼するか、あるいはそれができない時は、箱を小さく折り畳んだり切ったりしてゴミ袋に入れるようにということです。

私は、実際このようにしてダンボールの箱を処理しているのですが、箱の全体を折り畳むわけにはいかず、ハサミでこまかく切ろうとしても、なかなか固くて刃が入らず、たいへんな労力を必要とします。ゴミを正しく処理することは、町の清潔には役立ちますが、老人や病人にとっては優しさの欠けた規則と言えるかも知れません。

パリのアパートには足かけ七年いましたが、ゴミの出し方についてはたいへん寛容だった思い出があります。車輪付きの大きなゴミ箱が二つ置いてあって、一つは生ゴミ用、一つはカンやプラスチック用と聞いていました。ビン類は、街路に設置してある大きな円形容器に入れることになっていました。

しかし、アパートの住人は、生ゴミ用の中にビンやカンを入れたり、プラスチック用の中に古本や新聞紙やダンボールの箱をそのまま入れたり、ルールもくそもない滅茶苦茶な出し方をしていました。それでも、誰ひとり文句は言われなかったようです。

実は、私は、日本での習慣にならって生ゴミと紙類を一緒に出していました。しかし、それが思い違いであったことが、日本への引っ越しの時になって初めて分かったのです。古本や新聞紙がプラスチック用のゴミ箱に入っているのを見て、心中ケシカランと思っていたのですが、実はこのやり方が正解でした。

私が長期滞在している間に、このことについては何も言われなかったことを思いますと、町の清掃員やコンシエルジュがどのような処理をしていたのかは知りませんが、単に規則にルーズだというのではなく、或る「優しさ」を感じずにはいられないのです。

コンシエルジュは、ビンをわざわざ街路の容器まで運んでいかないで、ゴミ箱の横に出しておけばよいとまで言ってくれました。

日本にはもともと、町の清潔のためには積極的に奉仕しなければならないという義務意識があります。私の町の自治会では、年に一、二回地域ぐるみの清掃会というのがあって、その日は各家庭から一人ずつ係を出し、町内の掃除をしなければなりません。

私と妻は、もうだいぶ前に自治会を脱退しました。私は何年か自治会の班長も務めていたのですが、身体的な原因があって、この清掃会に参加することが難しくなったのです。妻も腰痛があって、長時間清掃にあたることは無理でした。

そこで、自治会に相談に行ったのですが、何か感情的な行き違いがあったようで、例外は認められないという返事でした。「それでは自治会をやめるしかありませんね」と軽い気持ちで言ったのですが、「じゃあ、そうしてください」ということになってしまったのです。

ところが、最近、市から「広報」「議会だより」「水道ニュース」「年報」等が家に届かなくなりました。これらの配布は、費用削減のため、自治会経由になったということでした。自治会を任意脱退した私のところへは当然届きません。「もったいない」を唱える県の方針がこんなところまで及んだのでしょうか。

困ったことは、ゴミ回収日の変更などは「広報」に発表されるため、正しい情報が得られなくなったことです。連休の時も回収日の変更が分からず、またまたゴミ袋が出しっぱなしになる場所でした。

各家庭は、毎週交代でゴミ回収の当番になり、動物よけのネットを張ったり、後始末をすることになっています。こういう時には、特に正しい情報を必要としますので、市に改めて納税者の立場から「広報」の配布を求めました。

市の回答は次の通りでした。「広報」を配布しないわけではない。役所の窓口においてあるから取りに来ること。あるいは、インターネットで市のホームページを見ること。

日本の、私の住んでいるところは、清潔ではあるが「優しさ」のない町、とりわけ、老人や病人に対する思いやりに欠けた町と言えるのではないのでしょうか。ということは、精神的には清潔ではないということを意味しています。

[2007/05/19 magmag]